

授業における学生のノートテイキングに関する一考察

野本 尚美・*上村 英男

(2023年3月6日受理)

A Study of Students' Note-Taking in the Classroom

NOMOTO Naomi · KAMIMURA Hideo

要旨：本研究では、英語関連科目において、教師の授業中の発話（教科書への書き込みの指示）に対して、学習者（短期大学生42名）が実際に書き込みをした状況と、その7週間後に実施したテストの回答について調査した。教師が3か所（重要箇所への下線2か所と、英文の日本語訳1か所）について口頭で書き込みを指示した結果、実際に下線を書き込んだ学生は約5割～6割、日本語訳を書き込んだ学生は約9割であった。また、テスト問題の正解者の内訳を見ると、教科書に書き込みをしていなかった学生よりも、書き込みをしていた学生の割合の方が多かった。

Key words：ノートテイキング ノート指導 書き込み 英語教育

1. はじめに

ノートテイキング (Note-taking) とは、学習者がノート・配布資料・テキストにメモをしたり下線を引いたりすることである¹⁾。「東大合格生のノートはかならず美しい」²⁾などのいわゆる“ノート術”に関する本も数多く出版されていることから、ノートテイキングは学習者にとって最も身近な学習方略の一つであり、多くの人が授業や講義においてノートに書き込むことやメモを取ることの重要性を認識していると言える。

ノートテイキングについてはこれまでさまざまな研究が行われている。浮谷(1990)は、提出されたノートを①黒板の説明を写しただけ（板書のみ）、②板書と図を書く、③板書と言葉の説明を書く、④板書と図と言葉の説明を書く、という4条件に分け、試験の結果と提出されたノートの集計結果として、板書のみの場合に点数が取れにくいことを明らかにしている³⁾。また、魚崎(2014)は、短期大学生88名を対象とした調査において、授業中の配布資料及びノートへの書き込みを行った項目数と授業内容を再生した項目数の相関を調べ、有意な正の相関があることを明らかにした⁴⁾。

このように、ノートテイキングは重要な学習方略の一つであり、学習成果に対して一定の影響を与えるものであると考えられる。しかし、ノートやメモの取り方については学習者本人のやり方に委ねられることが多く、実際の授業時においても、ノートテイキング方略を獲得していないと感ぜられる学生の存在も散見される。そこで本研究では、学習者のノートテイキングの実態を把握するため、英語関連科目において、教師が授業中に口頭で書き込みの指示を行った場合のノートテイキングの状況を調査するとともに、その後実施したテストの正誤との関連を調べたので報告する。

2. 研究課題

本研究では以下の2点を研究課題とする。

- (1) 授業中に教師が口頭で行った書き込みの指示に対して、実際に書き込みを行う学習者の割合を調べる。
- (2) 7週間後のテストにおいて、書き込みを指示した箇所に関する問題の正答率と、正誤別の書き込みの有無を調べる。

*福岡工業大学短期大学部 情報メディア学科

3. 研究方法

3. 1 研究協力者と調査手順

本研究は、非英語専攻の女子短期大学1年生42名を対象として、教養科目「英語Ⅱ」の講義中に行った。授業で用いる教科書は「Let's Read Aloud More! 音読で極める基礎英語」(角山・Capper, 2015)であり、各ユニットは、単語問題、会話文問題、文法問題、長文問題、リスニング問題などによって構成されている⁵⁾。教科書の問題には解答欄も設けられているため、基本的には教科書に直接解答や解説などを書き込む学生が多い(今回の調査では、ノートに解答・解説を書き込んだ学生は2名のみである)。

調査は2022年11月2日に行った。なおこの日は6回目の授業日であった。授業の内容は、一般動詞(現在形・過去形)に焦点を当てた文法問題であり、それらについて正解を提示し、解説を行った。また、授業の様子はビデオカメラにて記録した。教師が口頭で書き込みを指示したのは以下の3点である。

- ・適切な単語を選び、現在形もしくは過去形の適切な形にして文を完成させる問題

問題① The accident () last night.
【正解：happened】
(※「last night に下線を引きましょう」と口頭で3回指示)

問題② Maria came into the room and () off her coat.
【正解：took】
(※「came に下線を引きましょう」と口頭で3回指示)

- ・()内の主語を用い、会話が成り立つように適切な動詞を選んで文を完成させる問題

問題③ What ()? (you)
— I'm a teacher.
【正解：do you do】
(※「What do you do? の日本語訳として『お仕事は何ですか』と書きましょう」と口頭で5回指示)

問題①と②については下線を引くのみであるため3回の指示としたが、問題③については日本語の文を聞いて書き取る必要があり、学生にとってはやや負荷が大きいと判断したため5回の指示とした。なお、指示をした際に、これらの問題をテストに出すことは学生には知らせていない。

授業終了後に、解答などを書き込んだ教科書のページ(教科書ではなくノートを用いている学生はノートのページ)を、各自の携帯電話のメモアプリを用いてスキャン後、Moodle(学習管理システム)上にPDFファイルとして提出させた。PDFファイルにすることが難しい場合は、写真(JPEGファイル)を提出するよう指示した。さらに、7週間後(12月21日)に上記3点の問題(問題①・②については選択肢から単語を選び適切な形にして空欄に入れる問題、③は空欄に語を記入して日本語訳を書く問題)を含む筆記のテストを実施した。

3. 2 分析方法

Moodle上に提出されたPDFファイルまたは写真をもとに、上記3点についての書き込みの有無を調査した。教科書ではなくノートの画像を提出した学生については、last night(問題①)、came(問題②)について何らかの記述があり、学生が重要な部分と認識していると判断された場合は下線を引いたものとみなした。なお、この判断はまず共著者それぞれが独立に判断し、その判断結果を照らし合わせて齟齬がないことを確認したのちに最終的な判断とした。また、テスト問題の正誤別の書き込みの有無も調べた。

4. 結果

4. 1 書き込みをした学生の割合

教師の口頭での指示に対し、実際に教科書への書き込みを行った学生の人数と割合は次の通りとなった。

- 問題① last nightに下線を引いた学生
26名(61.9%)
問題② cameに下線を引いた学生
23名(54.8%)

問題③ What do you do?の日本語訳を書いた学生

37名 (88.1%)

下線を引くように指示した問題①と②は平均で58.4%の学生が、問題③の日本語訳については88.1%の学生が書き込みをしていた。③については、指示した回数が多かったことも影響したと推察される。

4. 2 テストの結果

7週間後のテストでの各問題の正誤と書き込みの有無をまとめたものを以下に示す。

3問すべてについてまとめると、書き込みを行ったなかで正解だった割合は67.4%、書き込みをしなかったなかで正解だった割合は50.0%であった。正解者のなかで書き込みを行った割合は74.4%、不正解者のなかで書き込みを行った割合は58.3%であった。

次に各問題に分けてまとめたものを示す。

まず、問題①についてまとめたものが図1である。問題①の正解者は42名中32名（正答率76.2%）であり、そのうち授業時に教科書への下線の書き込みがあった学生が21名（50.0%）、下線書き込みがなかった学生が11名（26.2%）であった。また、不正解者10名のうち下線の書き込みがあった学生が5名（11.9%）、書き込みがなかった学生が5名（11.9%）であった。

正解者のみの内訳で見ると、下線書き込みがあった学生は65.6%であり、正解者のうちの半数以上が授業時に下線を記入していた。また、不正解者の

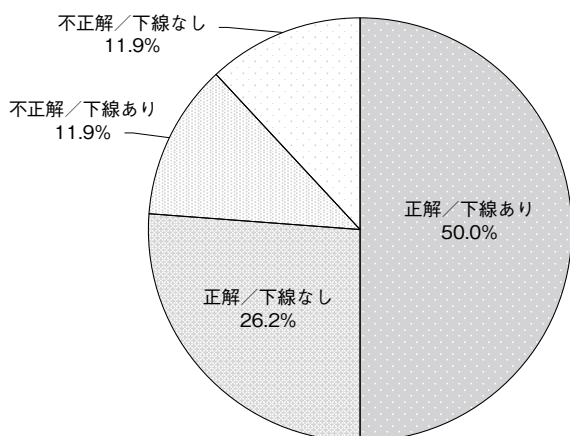


図1 問題①の回答と下線書き込みの有無 (n=42)

なかで見ると、書き込みの有無はともに50%ずつであった。

問題②の結果については図2の通りである。問題②の正解者は42名中26名（正答率61.9%）で、そのうち授業時に教科書への下線の書き込みがあった学生が18名（42.9%）、下線書き込みがなかった学生が8名（19.0%）であった。また、不正解者16名のうち下線の書き込みがあった学生が5名（11.9%）、書き込みがなかった学生が11名（26.2%）であった。

正解者のみの内訳で見ると、下線書き込みがあった学生は69.2%となり、正解者のうちの約7割が授業時に下線を記入していたことになる。また、不正解者のなかで見ると、書き込みがあった学生は31.3%であった。

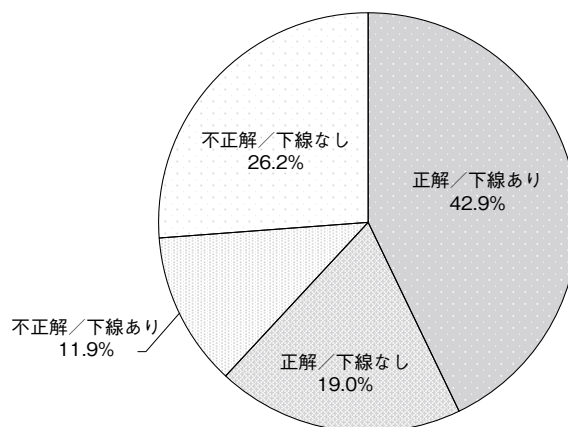


図2 問題②の回答と下線書き込みの有無 (n=42)

問題③の結果をまとめたものが図3である。問題③の正解者は42名中20名（正答率47.6%）で3問のうち最も正答率が低かった。そのうち授業時に教科書への日本語訳の記述があった学生が19名（45.2%）、記述がなかった学生が1名（2.4%）であり、不正解者22名のうち記述があった学生が18名（42.9%）、記述がなかった学生が4名（9.5%）であった。

正解者のみの内訳で見ると、記述があった学生は95.0%であり、ほとんどの正解者が授業時に日本語訳を書き込んでいた。また、不正解者のなかで見ると、書き込みがあった学生は31.3%であった。

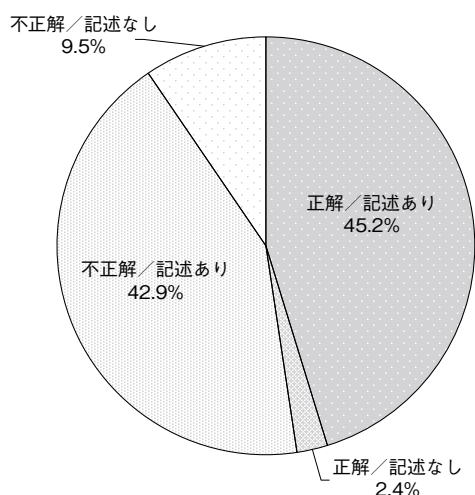


図3 問題③の回答と日本語訳の記述の有無 (n=42)

5. 考察

問題①～③において、テストの正答率はそれぞれ76.2%、61.9%、47.6%であった。問題③は問題①・②に比べ難しかったことがうかがえる。また、授業時に下線や日本語訳を書き込んでいた学生の割合は、それぞれ61.9%、54.8%、88.1%であり、平均すると66.6%であった。特に問題③においては、テストで正解した学生のうち95.0%が授業時に書き込みをしていた。

問題③の日本語訳の書き込みが問題①・②に比べて多かった理由として、単に指示をした回数が多かったからというだけでなく、“What do you do?”の意味が、直訳から想像される意味とは違い、相手に職業を尋ねる表現であるということを授業で初めて認識した学生が多かったためではないかと推察できる。一方で、問題③は、授業時に日本語訳を書き取っているにもかかわらずテストでは不正解だった学生が多かった。このことは、特に学習者にとって難易度の高い内容の場合、ノートテイキングのみでは十分な学習成果にはつながりにくく、事後の見直しや復習が重要であるということを示唆している。

問題①と比べて問題②の方が下線を引いた学生が少なかった点については、問題①は答えを記入する空欄のすぐあとに下線を引く部分 (last night) があるが、問題②は空欄から離れたところに下線を引く部分 (came) があるため、口頭だけの指示ではどこに下線を引くべきかわかりにくかった可能性が

ある。また、ビデオに記録された授業の様子を確認すると、問題②の解説時にはcameに下線を引く指示をしたあとにtake off (脱ぐ) という熟語についての説明および板書をしていた。そのため、下線を引く指示よりも板書されたものの方をより意識した学生が多かった可能性も考えられる。

問題①よりも②の正答率が低い点については、先述したように下線を引いたcameが空欄から離れた位置にあるために、問題を解く手がかりとして認識することが難しかったことが考えられる。また②の文には①のlast nightのような明らかに過去を表す語が含まれていない。そのためtakeという動詞は選択できたもののそれを過去形にするという段階で躓いた学生も見受けられた。

授業時に書き込みをしなかった理由については、教師の言葉を聞き逃したなどの場合や、すでに自分が十分に理解している内容であったため敢えて書かなかったなど様々な理由が考えられる。しかし、問題③について、授業時に日本語訳の書き込みをせずテストで正解した学生は1名のみであったことから、授業時に書き込みをしなかった学生の多くは、内容を十分に理解していないが、何らかの理由によって書かなかったと推察することができる。

最後に、学生の教科書を見てみると、教師が記入の指示をした3点以外にも多くのことをメモしていた。提出された1ページの中で解答以外に書き込まれた下線やメモの総数 (本研究で取り上げた3点を含む) を調べると、一人の学生につき約9.5個の書き込みが確認された。メモの中には、教員側として学生が書き取ることを想定していなかった事も含まれており、学生の習熟度によっては、各問題の本質的ではない部分でも書き留めたいと感じる事柄が多くあることが分かった。授業においてはこれらのことを考慮し、学習者の様子をよく観察した上で、ノートに記入するための時間の確保や話すスピードなどに注意を払いながら授業を進める必要があると思われる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、教師が口頭で書き込みを指示した

下線や日本語訳について学生のノートテイキングの様子を調査した。その結果、平均で66.6%の学生が実際に書き込みを行っていることが分かった。また、ノートテイキングは学習成果につながる一方で、特に難易度の高いと思われる内容では、ノートテイキングだけでなく見直しや復習も重要であることが分かった。

授業や講義においてノートやメモを取ることは一般に広く浸透している学習方略である。しかし、その内容について教師が一つ一つ確認をするためには膨大な時間と作業を要するため、ノートやメモの取り方については学習者本人のやり方に委ねられることが多い。自律した学習者に成長するという観点からすれば、自身の理解度を考慮し、重要であると認識した事柄については自らメモを取る姿勢を涵養することが大切であり、教師もそれらのことを考慮しながら授業を進めることが重要であると考えられる。

終わりに、今回の調査では、ノートを取らない理由については同定することはできなかった。ノートテイキングについては、さまざまな心理的要因や学習者の特性が関与していると考えられることから、今後、ノートを取らない理由を詳細に調査し学生の内的状況を明らかにすることが課題である。

引用文献

- 1) 小林敬一『共同作成の場におけるノートテイキング・ノート見直し』教育心理学研究 48(2), pp.154-164 (2000)
- 2) 太田あや『東大合格生のノートはかならず美しい』文藝春秋 (2008)
- 3) 浮谷秀一『授業におけるノートのとり方の研究(I)』日本教育心理学会 第32回総会発表論文集, p.385 (1990)
- 4) 魚崎祐子『短期大学生のノートテイキングと講義内容の再生との関係：教育心理学の一講義を対象として』日本教育工学会論文誌, 38(Suppl.), pp.137-140 (2014)
- 5) 角山照彦・Simon Capper『Let's Read Aloud More! 音読で極める基礎英語』成美堂 (2015)